

ところで、この筆写本には唯一神道の湯立行事の次第が詳細に記されており、文中の随所に「要文」が示されている。例えば湯立神楽の最後に笹ぼてを両手に持って湯を振り散らすときの「要文」は

清久潔久波羅伊立流愛毛高天乃原奈礼波祓伊須津流毛
阿良伊曾乃那美

右の歌を三度となえ、次に天清浄、地清浄、人清浄と唱えながら祓いをする」と記してある。残念なことに、先述の『湯立一式仕方控』と『湯立番組帳』には、このような神楽の「要文」は記されていないので、以上の記述も推測の域を出ないものである。会員の皆様のご批評をお願いしたい。

久留島藩鶴見村の産業

安部 作 男

豊後国速見郡鶴見村（現在の別府市大字鶴見）の農業の記録は、正確な資料として多く残されているが、手工業の記録や調査資料については皆無に等しい。しかし、

わずかではあるが各集落の世話方控や胆煎役（組頭）の旧家に残っている資料により少しずつではあるが解明されてきた。ただし、肝心な総生産の集計資料は残っていない。

小藩の厳しい宿命、財政確保のために少々無理な地方支配が行なわれたことは各所に見られる。

久留島藩飛地鶴見は、江戸時代後期の頃までは、御門川（春木川）を挟んで北がわを北中村、南がわを鶴見村と呼んでいたが、俗に、北中、鶴見の両地区を合わせて、鶴見千石ともいわれていた。

手工業の中心地は鶴見村で、ここは太陽の恵みを充分に受ける斜面台地であるが、水の便が悪く水稻耕地に適さない荒地や雑木林が多かったからであった。

主要産物の第一に蠟ろうの製品加工があげられる。鶴見村では、原料となるハゼの実を採るために植樹活動が盛んに行なわれ、特に、天保の改革後は急ピッチで進行した。小倉、竹之内、大島、原、中組あたりの原野や山野は当然のこと、字境いの道路に至るまでハゼの木が植えられた。

村人が収獲したハゼの実は、俵やカマスに詰められて原中の上に設けられた請取場原野に集められ、各村役立ち会いのもとに藩役人に渡された。藩役人は品質や出来高に応じて銭を払い、百姓達に壘産を競わせた。

集荷されハゼの実は製品にするために、原中の直江庄屋敷の北がわにあつた蠟倉に運ばれ、藩役人立ち会いのもとで製品化された。完成した蠟は三寸五分四角に固め、最後に藩印を押して頭成の和泉屋に送られた。蠟は和泉屋が一手に引き受けて、江戸、大阪、で売りさばいた。当時、久留島蠟は高級品として珍重されていたといふ。

和紙の原料であるみつまた、こうぞの殖産にも力を入れた。文化年間に開発された大畠が最適地であつたが、他にも、原、森山、実相寺山、遠くは大平山々麓にまで栽培された。

成長した原木の皮を剥いで半製品にした樹皮は、いちおう北中の倉場に納められた。秋から冬にかけて倉出しして、今井村の上手にある紙漉き場の「タタラ」に運び、伊予国（愛媛県）より迎えた職人に和紙を漉かせ

た。タタラ地区は「豊富な清水の湧く場所にて最高水質なり」と記されている。

硫黄生産は、久留島藩六代藩主泰清侯通祐の明和二年（一七六五）の頃に、本格的生産活動を始めたようである。以前から、鶴見連山の北山ガラン岳の下岳の鍋山に、豊富な硫黄源が数多く発見されていた。硫黄は、火薬の原料になるため採集を禁じられていたので、着工するのに長い時間がかかった。天領に隣接するため、幕府の目を逃れての隠密生産でもあつた。

久留島藩は、岡藩（竹田）より岩瀬主水正を、中川侯に乞うて玖珠に迎え、砲術指南をさせていたが、藩命で明礬山の山奉行に命じた。しかし、これは鍋山の硫黄採集技術者として、硫黄山開発事業にあたる隠れ任務であつた。

明礬山の作業人夫は、鶴見村の百姓が出稼ぎで働いていた。いっぽう、鍋山の硫黄採集現場は、秘密を保持するために、玖珠郡内の無宿者を人夫にし、一度入山したら再び娑婆にかえることのできない地獄飯場に入れて、□封じをしたといわれる。

硫黄の完成品の輸送は大変に気を遣った。明礬製品と一緒に運ぶのだが、米俵に入れたり味噌樽に入れたりした。風待港の頭成（豊岡）から出船の時にも日出藩の陽谷城の速メガネに発見されぬように苦心した。

硫黄の生産が最も盛んであったのは、文化年間（一八〇四〜一八一六）であり、藩の財政に果たす役割は多大であった。それも専売制を取り付けた明礬製造があったからであり、硫黄は明礬の陰に隠れた特産物であったといえよう。

だが、その硫黄生産も長続きせず、安政年間（一八五五〜一八五九）には作業を中止し、明礬生産に重点をおいていった。しかし、明礬製造も硫黄と同じ運命をたどるのである。

このように鶴見村が小藩久留島侯（一万二千五百石）の藩財政確保のために果たした役割は、手工業の成功にあり、地域貢献第一であったと言っても過言ではないと思う。

特に、水の便の悪い、また荒地を最大限に利用した手工業は、当時の小作、水呑み等の貧しい百姓にとって、

米が貨幣に替わる時代に現金収入の唯一の道であった。

農業中心から手工業へと地域改革を成し遂げた藩政改革であり、時代を先取りして挙げた業績は、当時としては大変勇気のある行為であったと思う。

参考史料

村役控帳

大会所日誌

蠟荷受渡状

朝日村史



藩印

別府大庄屋

初代 堀助之丞吉正について

安部 和也

堀家文書控に次の記録がある。

一、「略 私先祖先苗字渡辺氏ニテ候処 堀氏ニ改

候様被仰付候 夫ヨリ堀氏ニ相改候略」

別府の大庄屋として慶長より大庄屋制度徹底に至る迄